

《できることと、できないこと》

そよ風が私の両親と歩いていた。

両親はよく、こんなふうにお小言を言った。

「そっちへ飛んでいかないで」

「それを吹かないで」

「木を揺らさないで」

「なんであの子の紙をめちゃくちゃにするの？」

「葉っぱを撒き散らさないでね。そっとしておいて。」

「窓の方に行ったら迷子になるよ！」

「あなたが何ができるのかわからなかったら、歩くのは良いことですよ」と言いました。

私はまた木の葉の山のことを考えた。

《自動車》

ミシャは、「私のお父さんは『トヨタ』を持ってるよ！」と言った。

するとポリヤは「私のお父さんは『オペル』を持ってる！」と言った。

ヴァンナは「私のお父さんは『ニバ』！」、レノックカは「私のお父さんは『フォード』！」、

そして、タニヤは「私のお母さんは『ジグリ』を持ってる！」と、それぞれ言った。

「私達も『ジグリ』をもってるよ！」と元気よくビクター、レブーシュカ、ゼニヤが言った。

みんなが自慢合戦で疲れた頃、クシューシャがぼそっと言った。

「私のおばあちゃんは、手押し車持ってるよ…」

誕生日パーティー

アフリカでゾウが生まれた。そのゾウは目を開くと、この新しい世界を知った。

「それは何？」とそのゾウはおかあさんゾウに聞いた。

「バオバブよ」とお母さんゾウは答えた。

「これは？」

「空さ」

「空には何があるの？」

「太陽や雲があるわ」

「じゃあこれは？」と聞くと、

「『何』ではなく『誰が』だ！私は鳥だ！」と、年寄りのマラボウが文句を言った。

「あそこには何があるの？」と次から次へ聞いた。子ゾウの質問攻めは止まらなかった。

「山よ」とお母さんゾウは木の枝でなでながら答えた。

「とっても大きくて、美しいわ。あなたみたい。」

そう言いながらお母さんゾウはぎゅっと子ゾウを抱きしめた。